

中山間過疎集落の廃校を契機とする住民意識調査

—和歌山県田辺市龍神村殿原—

米倉 圭子

キーワード： 廃校, 住民意識, 過疎化, 高齢化社会

1. 背景

昭和 30 年代以降の高度経済成長，第一次産業不振を通して，農山村地域から都市地域に向けて若者を中心とした大規模な人口移動が起こり，農山村地域では住民が急激に減少した。

過疎集落が抱える問題の一つに，廃校数の増加が挙げられる。平成 15 年以降，公立焼耐高等学校の年間廃校数は 400 校を超えており，今後も廃校数は増加すると考えられる。学校は，単なる教育施設ではなく，地域の子供たちを育て，それを支える住民とともにさまざまな思い出や記憶を共有してきた住民の心のよりどころである。過疎高齢化が進行する地域では，人と人，人と土地とのつながりが強くなり，その思いは一層深い。そのため，過疎集落で，学校が統廃合することは，集落の活力低下や衰退の加速を引き起こし得る要因として深刻に捉えられている。

2. 目的

本研究では，「過疎集落の活力，そこに生きる人々とその生き方」と「廃校」は密接に関わりあっていると考え，和歌山県田辺市龍神村殿原地区を調査対象とし，平成 21 年 3 月に閉校した殿原小学校の廃校前後の 1 年間を通して「廃校と住民意識の関係」を調査し，その変化を捉えることを目的とする。廃校の利活用が推奨され，さまざまなモデル利用が提案・実施される一方で，その利用は法規制や立地条件，資金，運営主体，利権など非常に複雑で困難であるうえに，過疎地域のような人口が少ない地域では，それらに継続的な利用等さらなる課題が加わる。過疎集落の廃校利用の実態から，廃校利用は単に，宣伝効果や経済的效果など外部への発信としてだけではなく，「なぜ使うのか」「どう使うのか」そして「どう生きるのか」という住民意識からの視点が必要であると考え。

3. 研究内容

平成 20 年 5 月から，殿原小学校が廃校に至る過程において，地域の活動内容や住民の思いをヒアリング調査し，地域における学校の意義を述べた。平成 21 年 9 月から 12 月に田辺市役所でインターン研修時とそれ以降に，殿原小学校区において調査を行った。廃校以前には，一様に寂しさや不安が聞かれ，地域はこのまま衰退するようにみえたが，廃校以後の調査では，校舎跡地利用を介して地域は再び盛り上がりを見せていた。学校利用状況の考察と住民へのヒアリング調査からその要因を明らかにした。

4. 結論

殿原小学校区の住民意識にみられた盛り上がりには，3 要因に依ると考える。1) 先人が残してきた智慧や技量など伝統に対する敬意（タテのつながり），2) リーダーを支える仲間の存在（ヨコのつながり），3) どう生きるかと問い続けること，である。それらは，かつてあたりまえであったつながりや生き方であり，急速な成長の中で私たちが見落としてきたものであり，見直していくべきあり方であると考え。